慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	民族学・フォークロア・東洋史学のはざまで
Sub Title	Interdisciplinary research tradition ; ethnology, folklore and Oriental history at Keio University
Author	伊藤, 清司(Itoh, Seiji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1991
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.60, No.2/3 (1991. 6) ,p.79(253)- 89(263)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	報告 第二回座談会 三田史学の百年を語る
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19910600-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

民族学・フォークロア・東洋史学のはざまで

伊藤清司

いまのお話のように、まず民族学の問題を中心にしてお話をはじめます。話は、自然に東洋史のほうへいくかと思います。

いまお話がございましたとおり、柳田国男が慶應に出入りしますのはずいぶん古く、約七十年前です。私、詳しく調べたわけではございませんが、柳田国男が一番最初に慶應で講演されましたのは確か大正二年でございます。それから数回にわたって講演をいたしております。話は一足飛びに飛びますけれども、最後に慶應で講演をされましたのは、昭和三十五年、三田史学会の主催でございます。その間数回、中には三日連続というような講義もありますので、延べにしますと十回ぐらい講義をしていらっしゃいます。その柳田国男の講演を主催したものの一つに地人会というのがございます。この会はちょこちょこと中断したりしておりますが、いまだに続いております。歴史・文学・社会・宗教・民族・民俗・考古学などを糾合した学際的な研究会で、これは史学科、文学部の歴史とともにあると言っていいくらい長い歴史がございます。すでに数十年も前から、このような学際的な研究会を三田が持っていたということは誇りにしていいと思いますとともに、三田の学問の特徴はまたこれによってあらわされるのではないかと思います。とにかく、柳田国男はその地人会などにも数回来て話をしていらっしゃいます。

柳田国男が大正七年に三田山岳会という会で講演をしております。そのとき、柳田国男は貴族院の書記官長、いまで言えば参議院の事務総長に該当する、お役人としては相等の上部におった方です。この講演を依頼した山

岳会のメンバーに、後でお話しします松本信広先生、学者ではありませんが、外務大臣をやった藤山愛一郎等々がいるわけですが、この辺のお話を後ほどするとして、話を前のほうへ進めていきたいと思っております。

柳田国男がしばしば慶應に出入りしております間に、慶應の専任教授にしたいという動きがあったようです。その前に五年間ほど、先ほど近森先生が話しましたが、民間伝承というタイトルでフォークロアの講義をしていらっしゃいます。そうしたものが契機になっていると思いますけれども、柳田国男を慶應の文学部の、しかも国史の教授に迎えるという、画期的というか突飛というか、そういう動きがあったようです。これは実際には実現しておりませんけれども、先ほど最初のご挨拶で三木先生のほうから、慶應は在野の学者をどんどん抜擢するというところにも大きな特徴があった、あるいはあるというご発言だったのですけれども、そうした動きの一つとして記憶されていいことだと思います。結果としては専任教授にならずに済んでおりますが。

この辺のいきさつにつきましては、昭和五十年八月に出ました『三田評論』の中に、柳田国男の生誕百年を記念いたしまして、「柳田民俗学の再検討」という題で座談会が開かれております。松本信広、立教の教授でございます神島二郎、それから国史の教授でいらっしゃいました中井信彦、それから白梅学園大学の桜田勝徳（柳田国男が五年間講義をしておりますときの学生さんでございます。もちろん民俗学の専門家です）という方々が座談をされておりますが、それに、簡単ですが、その辺のいきさつが書いてあります。もしこの計画が実現しておりますと、すでに国文学のほうには折口信夫が教授として就任しておりましたので、文学部文学科に折口信夫、史学科に柳田国男という壮々たる巨頭が相並ぶことになったのですが、残念ながら実現しておりません。しかし、柳田と慶應のご縁はずっと長く、先ほど言った昭和三十七年の講演まで続いておるわけで、こうした縁が、松本信広先生を大きく育てていく一つの土壌になっていると言っていいだろうと思います。

松本先生と柳田国男との出会いはいろいろございますけれども、重要なものの一つは、柳田国男の東北の旅行、これは後に『雪国の春』という作品になって実を結ぶわけですが、この行脚に同行したことですけれども、先ほど言った最初の出会は、三田山岳会のメンバーの一人として松本先生が貴族院の書記官長宅に講演を依頼に行っ

たときのようです。その講演は、もちろん山岳会の講演で山に関するものですが、柳田国男は山の民に関するお話をされたようで、聞いて松本先生は強い刺激を受けて、広い意味の民族学に傾斜する最初の動機になったようです。それから頻繁に柳田国男の家へ出入りするようになったというように聞いております。

三田における民俗学の系譜を語りますといろいろ錯綜して参りますが、とにかくそういう一つの経緯があって、松本信広先生が、後で触れますけれども、留学先のフランスから帰られて、三田に民族学の講座を持たれ、定年で退職されるまでずっと三田でこの講義をお持ちでございます。同時に、東洋史の教授として、東洋史のほうの講義もお持ちになり、ある意味では二足のわらじを履いておりますが、そこにまた松本先生の学問の特徴があり、同時にそれが三田の史学科の一つの大きな特徴でもあるということになると思います。

松本先生が最初、普通部に入学されまして、そして大学の予科に入られて、予科から大学学部に進むコースをたどられた方です。普通部のときに、橋本増吉という東京帝国大学の東洋史学科を出た学者に学んでおります。白鳥庫吉の門弟でこのときの同級生には壮々たる学者がおります。これは直接塾とは関係ございませんけれども、羽田亨（京都の東洋史をつくった方です）、それから原田淑人もその一人でこういう方々と席を並べて、東大の東洋史を出た方ですけれども、この先生が普通部で東洋史を持っておりました。普通部で東洋史を橋本先生に習ったというのを、ひとつ記憶にとめておいていただきたいと思います。

しかし、松本先生が史学科に入られて東洋史学科に籍を置くようになりました動機は、よくわかりませんけれども、先生自身の回顧談の中でのお話をそのまましますと、前回、この一回目でお話が出ました田中萃一郎先生との出会いが大きな動機だったようです。予科の学生の時代に、一教員の問題から学生がストライキを起こしました。そのストライキで学校との交渉委員の一人となったのが松本先生で、交渉相手は田中萃一郎でありました。田中先生は予科主任として活躍されて、次期塾長と目されておった学者です。若くして五十代の初めに亡くなったのですけれども。ストライキについて学生側の代表として交渉されたときに、交渉相手の田中萃一郎の人格に触れて感激し、そして、自分は史学科に進むことになったと松本先生は述懐していらっしゃいます。したがって、

史学科に松本信広先生がお入りになった直接の動機に、やはり田中萃一郎という大きな星があったと言っていいだろうと思います。

しかし、なぜ東洋史を選んだかということです。先ほど来の柳田国男との関係もございます。しかも、史学科に入る動機が田中萃一郎であったということですが、ご存じのとおり、田中萃一郎という方は非常に幅の広い学者で、いろいろな業績をお持ちで、特に東洋史学のほうでの大きな功績は、『東邦近世史』という当時としては画期的な著作を書いていることです。一方で、ドーソンの『蒙古史』の翻訳者としても知られており、大変幅の広い方でいらっしゃった。この方を五十代の初めに亡くしたのは、史学科にとりまして大きな損失であり不幸であったと思います。先ほども神山先生と別室で話をしたのですけれども、田中萃一郎先生がもしもう十年存命でいらっしゃったら、史学科の命運というか展開がかなり違っていたのではないかと思います。

さて、松本先生はその田中先生関係ではなくて、結果としては中国の古代史の研究への道を進むことになります。この件で大きく影響されたのは、当時、非常勤講師として来ていられた、中国経済史の草分けである加藤繁という大変な偉い学者です。当時、この方が慶應で授業を持っておりました。もう一人は移川子之蔵という学者です。ハーバード大学で学位を取り、颯爽と帰国して日本で人類学の講座をお持ちになっており、その新鮮な研究方法、こうしたものの影響等もあったようです。

そうした影響の下で、先生は中国の古代史の姓氏の研究というテーマを学部の卒業論文に選ばれました。それをトーテミズム、当時、民族学者の間で盛んに話題になっていたテーマであるトーテミズムという観点から解かれた卒業論文をお書きになっています。これは学部の卒業論文ですが、塾内の刊行物である『三田評論』その他に、活字になっております。

ところが、先ほどちょっと触れておきましたが、普通部で東洋史を学んだ橋本増吉という方が、松本信広先生が予科から学部に進んでまいりましたときに、東洋史の教授として普通部から学部のほうに移っておりました。したがって、再びここで松本信広先生が橋本増吉と師弟の関係で再会するわけであります。ところが、非常に偶然なことですけれども、橋本先生が東京帝大で白鳥庫吉の指導で書いた学部の卒業論文が、中国古代の氏姓の研究という全く同じテーマであったということです。すで

にご案内と思いますが、白鳥門下の東洋史学というのはいわゆる考証学でございます。それに対しまして、松本先生の志しておったのは、古典的、考証学的なシナ学ではなくて、学際的というか、かなり斬新な、あるいは当時として奇抜な学問でした。しかも、師の卒業論文と同じテーマを取り上げて、しかし、全く違った方法論によって論文を書くということで、そこに微妙な関係が生じたということが考えられます。

話は少し微妙な問題に入りますので話を前へ進めますが、そういうこともありまして、松本先生は自分の勉強をさらに本格的に進めるために、パリのソルボンヌに進まれました。そして、三十歳台の初めで、日本人としては初めて学位をお取りになって、日本へ颯爽として戻られ、塾の文学部の助教授に迎えられます。三十二歳のころだと思います、くわしくは後で調べてみます。それ以来、松本先生は橋本先生と並んで東洋史の講座を持ちながら、一方で民族学を持つという関係になってまいりました。爾来、戦争をはさんで、先生が八十前後に定年でおやめになりますまで、慶應で東洋史と民族学の講義を持って参りました。

さて、文学部では考古学方面では有能な研究者がふえてまいり、人材が豊富になっていきますのに対して、これに雁行するため、民族学のほうでも研究者の育成に務め、外部のいろいろな学者を塾に招きまして、講座を持っていただいたりしてきました。それらの先生方はいずれも物故をしてしまいましたが……。関敬吾が史学科でたぶんフォークロアを講義されていた。近森先生などもその薫陶を受けました。現在、近森先生が民族学と考古学の接点に立った斬新な研究方法を取られているのも、関先生の影響が、間接、直接かわかりませんが、あるだろうと思います。それから、晩年に東京都立大学の教授になられた社会人類学の馬淵東一、この方なども松本先生と並んで、非常勤としてですが、三田の史学科で民族学の講義をお持ちでした。その他、数名の方が講義をもちました。ただ、松本先生自身が専任の教授として民族学を持っていたものですから、考古学ほど非常勤の方々が入れかわり立ちかわりということはなかったように記憶しております。

そういうことで、松本先生は東洋史、一方で民族学の講義も持つと同時に、非常に幅の広い方でいらっしゃって、言語学等々にも関心をお持ちで、そういう学者も義塾に出入りしておりました。話はもどりますが、フラン

スで学位論文を取りました論文の主論文が「日本語と南アジア諸語との比較研究」というテーマで、副論文が「日本の神話の研究」でございます。後者は、平凡社の東洋文庫にも入っております。

そういうことで、先生は東洋史研究室に席をおきながら、一方では、今日の言語文化研究所の基礎づくりもされました。先ほど三木先生から、史学科は、いま式で言えば学際的に、いろいろな問題に関心を持って総合的に歴史を考えるという特徴があるとおっしゃいましたが、松本信広先生などはまさにその代表的な一人であったのではないかと思っております。

しかし、やはり東洋史専攻でございますので、必ずしも総合的な、あるいは学際的な研究だけでいいわけではございませんので、その後、いろいろ手当てされましたが、その点については後ほどまた触れたいと思います。いずれにしても、東洋史は何でもできるところだというような、いい意味でも悪い意味でも風評がございまして、どの学部、どの専攻でもできないことを東洋史専攻でやれそうだというような空気がございまして、それが同時に、東洋史専攻というものの一つの大きな問題点であったということが、率直に反省させられるかと思います。

東洋史学専攻の教授の可児先生の書かれた修士論文がいま中公新書で『鵜飼』として出版されています。それから江坂輝弥先生もまた縄文の研究家として世に出られた方ですが、いずれも学生時代の所属は東洋史です。私なども全くわけのわからないことをやりながら東洋史に所属し、近森正先生もまた東洋史学専攻に属するというようなことで、東洋史学専攻は、いい意味では幅の広い、実体は雑学専攻みたいな特徴がありました。こうした東洋史を、何とかして東洋史専攻という体裁を取りたいというお考えが、後ほど出てまいります、前嶋先生に慶應へ来ていただくようなことにもつながっていくかと思います。

もう一つ松本先生について申し上げたいことは、すでに申したように、松本先生は若い時代から民族学に関心を持っておりましたが、フランスへ参りました当時のフランス社会学は壮々たるメンバーがおった時代でございます。ソルボンヌ大学でフランス社会学の講義をお聞きになって、当時のフランスのシノロジーの洗礼を受けてまいりますが、当時先生がお聞きになった学者としては、アンリ・マスペロ、それからモース、シナ学者として著名なマーセル・グラネー、こういった方々の講義を聞き、

あるいは席を同じうして勉強されております。こういうところで先生の民族学への関心が一層高まってきているわけです。こうしたフランス社会学的な物の見方、研究方法が三田に導入されてまいってくるわけであります。

一方で、国内ではようやく学問としての形を取り始めたフォークロア、それから同じく民族学が、当時澎湃と起こってくるのですが、そうした同志と伴いまして、南の会という会を組織されております。その主なるメンバーは、すでに物故の方々ばかりですけれども、岡正雄、それから八幡一郎、杉浦健一、こういう方々と南の会を組織されまして、昭和十二年、ミクロネシア、当時、日本の南洋委任統治下にありましたが、そちらのほうの民族学的な現地調査にお出でになり、ニューギニアまで足を伸ばしたのを契機にして、先生はオセアニアのほうにも大きく視野を広げていきます。

その当時、塾の出身者で南洋のほうで活動していました方々などとの接触を通じて、非常に貴重なオセアニア関係の民族標本が慶應にもたらされる契機になりました。これが今日慶應の民族学、考古学研究室が持っているオセアニアのコレクションとなると同時に、こうしたものが一つの導火線になって、今日、近森先生のような優秀なオセアニストが出てくるということで、これもやはり松本先生の蒔いた種の大きな一つの結実であろうかと思っております。

もう一つ、松本先生の大きな業績は、インドシナを中心とした東南アジアの研究でございます。先生がフランスにおります当時、インドシナはフランス領植民地でありました。フランスから帰られまして間もなく、塾から海外調査の費用、これは望月資金という名ですけれども、これをいただいて、三カ月ほどのインドシナ旅行をされております。このころから先生のインドシナへの学問的な関心がどんどん進んでまいりまして、東南アジアの研究の草分け的な存在となってまいるわけです。こうしたインドシナへの関心は、今日、言語文化研究所にいらっしゃいます川本邦衛先生を中心にした研究者の活躍という大きな花を咲かせているのであります。とにかく非常に視野の広い人でございましたので、そこで勉強しておった私達は、先生の講義を消化することがなかなか難しい、そういうじれったさを感じておった記憶があります。

そういう中で、松本先生はさらに視野を広げられて、中国からさらに西アジアのほう、あるいはインドのほう

にまで慶應の研究の対象を広げよう、また広げる必要があるとお考えになったのです。そのために、辻直四郎というインド哲学の大学者を、今日の言語文化研究所の前身でございます語学研究所に招かれて、インド学者の養成に務められたこともあります。これは残念ながらあまり実を結ばずに今日に至っております。

一方で、西アジアへの展望もお持ちでありまして、たまたま前嶋先生という格好な学者をお迎えして、それから慶應におけるイスラム研究の大きな展開を見るに至ったのであります。当時、慶應には偉大なる言語学者でございます井筒先生がおりまして、井筒先生が言語文化研究所の前身であるアジア研究所におりました。――話が前後いたしますが、いまの塾の女子高校のところに徳川さんのお屋敷がありまして、そこに太平洋戦争のさなか、アジア研究所、これは総合的な研究所で、経済学、法学部、文学部などの有能なスタッフを糾合した研究所です。恐らく松本先生の構想などが相当これに反映していると思いますが、実は先生はヨーロッパのソルボンヌその他の大学の研究所を見てまいりまして、慶應にも国際的に通用する研究所をつくりたい、そういう大きなお考えを持っておったようです。ただ、一私学としてなかなか実現を見なかったわけでありますが、その一つの最初の構想が、アジア研究所の形で花が咲いていたのであります。

このアジア研究所に井筒先生をお招きしてポストに据えられておったようですが、後に井筒先生を中心にして、今日の言語文化研究所ができてくるわけであります。塾には井筒先生を中心にして、アラビア語学、イスラム学などの西アジア学が芽生え始めておりましたけれども、さらにこれを充実拡張したいというお考えを持っていたところに、前嶋先生との出会いがあったようです。前嶋先生は、東京外語をお出になり、それから東大の東洋史へ進まれるという経歴の学者で、これについては後ほど三木先生と坂本先生からお話があると思いますけれども、私は次のようないきさつで慶應に前嶋先生はお出でになったと聞いておりますが、これが私の記憶違いであれば、後ほど訂正していただきたいと思っております。

当時、松本先生は井の頭線の永福町の駅近くにお住まいでした。松本先生が駅の近くの東側、そして前嶋先生がちょっと離れた西側にお住まいがあって、最初のうちは直接関係がなかったようです。たまたま前嶋先生が松本先生に永福町駅のホームでお会いになったときに、前嶋先生は大変温厚な方でいらっしゃいますから、おじお

じとというのがたぶん実情であろうと思いますけれども、自分は東京外語でフランス語を勉強した、慶應でフランス語の先生にでも使ってもらえないだろうかというようなお話があった。そこで、松本先生がいろいろと前嶋先生とお話をしたところ、いや、そういうことではなくて、東洋史専攻で西アジア学をやってもらいたいということになってお招きしたというふうに聞いております。その辺のことをこれからお二人に引き継いでいただきまして、前嶋先生を中心にした、慶應における西アジア学等についてのお話を承ればと思っております。

近森　いま伺っていますと、柳田国男が日本の大学で最初に民俗学の講義をされたのがこの三田であった。そして最後に柳田国男が講演を持たれたのも、実はこの三田であったというわけです。昭和三十五年の最後の講演で柳田先生は、鼠と根の国の関係を説き、日本の民族文化の起源の問題をお話しされたように記憶しております。それが後に『海上の道』という一冊の名著として、柳田先生の最後の著作かと思いますけれども、世にでたわけです。

その本の中に、日本人が南のほうから海を渡ってやってきた。それで、古い時代の丸木舟というものが海上航行具として非常に大事なものであった。「これについては慶應義塾の松本信広君が最も慎重なる研究を進めておられるので、諸君は安んじてその結果を待たれよ。」というふうに一節書かれています。実は丸木舟の研究を考古学的な資料を探究して進められたのは、先年亡くなられた清水潤三先生でした。千葉県の九十九里海岸を中心として、精力的な発掘調査をずっと続けられた。今日、三田の山は丸木船の資料が、全国でも最も集まっている場所の一つになっております。こういった成果をこれから実らせていかなければいけない。これは私どもの役割の一つだと心得ております。

松本先生はそういうわけで、考古学、民族学、そしてオセアニア研究、東南アジア研究、インドシナ研究、中国古代史、そしてさらに井筒先生や前嶋先生を介して西アジアやイスラム研究へ、壮大なアジア太平洋研究の構想をうちたてられたのだと思います。

松本先生の行政的な功績のひとつとしては国立民族学博物館の設立があります。先生は日本においてフランスの人類博物館（ミュゼ・ド・ロム）のような高い研究水準をもつ、民族学博物館の必要を第二次大戦以前から唱

えられておりました。戦争中には当時の軍政府に対しても働きかけて発言をつゞけられましたが、戦後になってからは、日本学術会議に出て民族学博物館の設立を推進されました。丁度はじまった南極調査の計画と競合することになり、大変苦労されましたが、学術会議の決定にもとづいて、ついに一九七七年に国立民族博物館が大阪に開かれることになったのです。

先生の緻密な学問態度は、一方において非常に現実志向が強いことです。ヴェトナム戦争の最中には、新聞や雑誌を通じて、そのころ、まだ充分に理解されていなかったヴェトナム人の考え方や、民族の歴史をひろく説かれるとともに、アメリカのヴェトナム介入がいかに犯罪的であるか、ヴェトナム戦争に協力する政府の態度を一貫して批判されました。

戦後間もなく開始された三田の野外調査として、九十九里地方の総合調査は注目すべきものです。社会学の米山桂三、農村社会学の有賀喜左衛門、近世史の中井信彦、地理学の西岡秀雄、考古学の清水潤三らの諸先生を組織し、実際に推進させたのは松本先生の力によるものです。まだ九学会の総合調査がはじまる前の、日本では、まだ全く新しいインターディシプリナリーな地域研究の方法でした。その計画には、先生の壮大な古代文明論の構想があったことです。フランスではちょうどモースの一門からでたアンドレ・ヴァラニャックがアーケオシヴィリザーションを唱えておりましたが、そうした考え方に一脈あい通じるものがあります。

先生の意図されたものは、戦後の混乱と変化のはげしい日本の社会の将来の方向をさぐることでした。日本の社会の分析をするとき、その精神的中核であった村々の神の由来を知り、村人を結びつけている力がどんなものであるか、つまりフォークロアの過去と現在を知ることによって、日本社会の方向をさぐろうとされたわけです。実に壮大な実験が九十九里を舞台にはじめられたのです。

よく松本先生は日本民族の起源論における南方系統論者であるかのようにいわれますが、私はけしてそうではないと思います。日本の伝統文化の中には、ひろく太平洋をめぐる周縁文化と共通する国際的な性格があることを、はやくから説かれていました。国粋的な日本文化論に対して戦前から批判的でした。その点は柳田国男らの民俗学とは大きく異なる点です。九十九里の調査の過程で進展した古代丸木船の研究も、そうした視点に立つものであったといえます。

それでは、次にイスラム研究の百年を語っていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

三木　それでは、先に坂本先生に話していただいて、後で私が補足する形を取りたいと思います。